

「共に力をつくして」

詩 篇 第33篇1節～5節  
ローマ人への手紙 第15章22節～33節

説 教 岡村 恒牧師

「どうか、共に力をつくして、わたしのために神に祈ってほしい。…共になぐさめ合うことができるように祈ってもらいたい。」(30節、32節)キリストの使徒パウロが、わたしのために祈ってほしいと願います。キリスト教徒を激しく迫害していたパウロを、復活された主イエスが新しく生まれさせて、伝道者にして下さいました。そして、福音が全世界に宣べ伝えられ、今朝、この大阪教会でも礼拝が行われています。

パウロは、3度目の伝道旅行からエルサレムに向かおうとしています。そしてローマを經由して、世界の果てにまで向かおうとしています。「この地方にはもはや働く余地がなく」(23節)とパウロが言うのは、まだキリストの名が一度も語られていない所にでかけて行き、主イエスの福音を宣べ伝えることを、パウロが自分の使命だと考えていたからでした。これは、もちろんとても困難なことで、激しい迫害や、様々な苦勞を背負うことでした。それでもパウロはさらに進んで、世界の果て、イスパニアに行こうと言うのです。主イエスの血によって罪を赦され、神の子として頂いた以上、全てをお捧げして地の果てにまで行って、この福音を宣べ伝えずにはいられなかったのです。

その前にパウロは、マケドニア地方の教会からの献金を預かり、困窮していたエルサレム教会を目指しました。ユダヤ人以外の異邦人も救われる、という救いの約束の広がりや、エルサレム教会の信仰者たちにも知って欲しかったのです。選ばれた民だけが救われると考えてきたユダヤ人にとって、異邦人も信仰によって救われるということは受け入れ難いことでした。神の救いの力が、人間の期待などはるかに越えることを、エルサレムの兄弟姉妹も知って、一緒に驚き、喜び、一つ思いになって主を讃美してほしい、とパウロは考えたのです。

今朝の御言葉の中に「行く」という言葉が何度か出てきます。パウロはエルサレムに行き、またローマにも行きたいのです。しかし、イスパニアに行くという時は、行ってまた帰ってくる、という言葉ではなく、そのまま行き続けるという意味の言葉が使われています。パウロは、ローマを通過してイスパニア、つまり地の果てにまで出かけて行って、後戻りはしないのです。さらに、福音を宣べ伝え続けると言うのです。これは、最後にたどり着く場所を知っている

者の言葉です。主イエスを信じて、主イエスの約束を握りしめて《終着点》を知っているキリスト者は、この人生が環状線をグルグル回り続けるようなものではないことを知っています。私たちの地上の人生もまた、まっすぐ、帰るべき故郷を目指す旅であることを、私たちは知っています。通過点にすぎない駅《station》を經由しながら終着駅《terminal》を目指して、私たちは歩んでいます。いろいろな駅に立ち止まりながら終着駅に向かっていきます。昨年地震以来、自分の人生がやがて終わる旅であることを多くの人を知り、その終わりについて思い巡らすようになりました。目に見えるものはやがて皆過ぎ去っていくこと、目に見えない確かな終着点が必要であることに、気付きました。パウロは、福音を宣べ伝えながら、まっすぐ終着点を指さし、目指したのです。

主イエスは、最初から12人の弟子を選び、共に歩むようにお定めになりました。聖霊降臨祭(ペンテコステ)にも、集まって一緒に祈っていた《弟子たち》に聖霊が降りました。信仰者が一人一人孤独に歩むのではなくて、共に祈り、共になぐさめ合いながら歩むようと、教会をお建てになりました。主イエス・キリストは、教会を生み出すために、その血を流し、命を与え尽くして下さいました。誰かが信仰の旅に疲れ果ててくずれ落ちそうになっても、共に支え合い、なぐさめ合ってこの旅を歩むのです。信仰の先輩パウロも、「わたしのために祈ってほしい」と願いました。私たちが共に祈り合い、なぐさめ合って歩むことができるために、主イエスは苦しみ、血を流して下さいましたからです。

パウロは、エルサレムで捕らえられ、囚人としてローマに護送されますが、そこでさらに福音を語り続けました。自分のために兄弟姉妹が祈りを捧げ、支えてくれていることを知る者は、神の御心が実現していくために、喜んで歩み続けることができます。やがて世の終わりの日、主イエスが再び来て下さる日に、帰るべき故郷にたどり着き、共に、主の食卓を囲むことを楽しみにして歩むことができるのです。私たちは心をつにして、共に祈り合い、なぐさめ合いながら、この旅を歩みましょう。

(記 岡村 恒)